明石の史跡（５８）続・松江寺の鐘

本来、東松江の松江寺（正護寺）にあった鐘が、どうして広島に移動したのであろうか。妙慶院の寺伝によれば、福島政則が船にて播磨灘を通過したとき、突然船が停止してすすまなくなった。不思議に思い海底を探索させると、この鐘と薬師如来の霊像を得た。そこでこれらを持ち帰って、妙慶院に納めたという（以下出典を明記しない場合は、広島市史社寺誌による）。政則が播磨灘を西進したのは、慶長５年（１６００）１１月、関が原の勲功の賞として、安芸・備後両国で４９万８．０００石の太守に封じられて、入国する途中の出来事なのである。

妙慶院というのは、政則入国後、現在地に移し寺領１００石（一説に２００石とも３００石ともいう）を与えて菩提所としている。妙慶という院号は、政則の母堂の法諡にもとづくという。同時に、僧増誉を住職に招いたといわれる。寺伝では、増誉は明智光秀の遺子といい政則の内室は光秀の妹ともある。

妙慶院は、元和５年（１６１９）６月２日、政則改易後、寺域は縮小され現在の規模になったという。堂舎は、宝暦８年（１７５８）の大火で灰燼に帰し、享和元年（１８０１）には本尊が焼失。本堂は慶応３年（１８６７）に失なわれ、明治４年（１８７１）に再建の運びとなる。

松江から退去させられた鐘は、その後どうなったのか。承応年間（１６５２－５）に罹災し、音響が損なわれたという。さらに宝暦８年の大火に破砕し、その破片を集めて、寛政１１年（１７９９）８月１日に改鋳なったものの、松江時代の原型はとどめてはいなかったろう。残念ながらこの鐘は現存しない。あるのは銘文の写しのみである。松江寺の鐘を不幸な運命に陥れたのはいったい誰なのだろうか。深い関心をもたざるをえないのである。

正護寺

日本歴史学会会員 茨木 一成